明日への道標

ランプを掲げた天使
―看護を職業にしたナイチンゲール―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

看護師が「白衣の天使」と呼ばれるようになったのは19世紀半ばのクリミア戦争からだ。戦地におけるフローレンス・ナイチンゲール（1820－1910）の献身的な働きに由来する。

しかし彼女自身が「天使とは美しい花をまき散らす者ではなく苦悩する者のために戦う者のことである」と語ったように地上の天使は戦いに明け暮れる日々を送った。周囲の無知、偏見、妨害と戦って看護を近代的な職業として確立する。

生涯に約150篇に及ぶ論稿を残し、看護学から医療改革、病院建築に至るまで非凡な才能を発揮した。独自にグラフ化したデータを駆使し、統計学の先駆者ともいわれている。既成のイメージに囚われているとナイチンゲールのほんとうの姿は見えてこない。

社交界の花と謳われても

ナイチンゲールはイギリスの上流階級である裕福な地主の次女として生まれた。両親の海外旅行中にイタリアのフィレンツェで誕生したことから、英語でフローレンスと名づけられた。

幼い頃から教養のある父と家庭教師から語学、文学、哲学、歴史学、音楽、美術など幅広く教育を受ける。なかでも数学に興味を示し、両親との旅行中に専用馬車の走行距離と移動時間を記録にとるような数字好きだった。

17歳で社交界にデビューし、才色兼備の令嬢としてたちまち上流社会の花形となり、独身貴族から求婚が相次いだ。ところが彼女は「立派な男性が求婚すれば女性が受諾しない理由はないという考えにはまったく賛成できない」と頑なに断りつづけた。貧しい農民への慈善活動を通じて人々に奉仕する仕事に就きたいと考えていたのだ。

フローレンス・ナイチンゲール

彼女の意志は母親の猛反対もあって受け入れられず、30歳になってようやく転機が訪れる。精神を病んだ姉を看護するためにドイツの病院付学園施設で看護法を学び、看護師になる決心を固めた。

周囲の反対を押し切ってロンドンの婦人専用病院で無給で働き始め、生活費は数少ない理解者である父が出した。のちに総監督者の地位に就き、病室への温水用配管、食事を運び上げるリフト、ナースコールの原型となる呼び鈴の設置など患者の視点に立った施設改革に次々と着手する。同時に病人の召使いと軽視されていた看護師に専門的教育を施し、患者に寄り添い、健康を回復させ、社会に送り出す不可欠な仕事として看護の職業的自立へ情熱を注いだ。

小さな種が芽を出して

1853年、帝政ロシアとオスマン・トルコ帝国によるクリミア戦争が勃発し、イギリスはフランスなどと連合軍を結成してロシア軍の地中海進出に対抗する。史上初の戦場特派員となったウィリアム・ハワード・ラッセルは前線の悲惨な状況を伝え、イギリス陸軍のずさんな医療体制を告発した。事態を重く受け止めたシドニー・ハーバート戦時大臣は旧知のナイチンゲールに従軍を依頼する。

1854年の冬、ナイチンゲールは女性看護師14名とシスター24名を率いてイスタンブール対岸の後方基地にあるスクタリ野戦病院へ出発した。翌年２月にようやく辿り着くと「私は地獄を見た。決してクリミアを忘れない」と語るほど想像を絶する光景が待ちうけていた。

病院内は不潔きわまりない状態で土埃や汚物まみれの硬い床に痩せこけた傷病兵たちが隙間なく横たわっていた。薬や食料などの必需品もろくに与えられず院内に蔓延する感染症や極度の栄養失調で死者は日を追うごとに増えていく。しかも軍医長官ら医局の幹部は女性の従軍を快く思わず露骨に邪魔者扱いした。

それでもナイチンゲールは怯むことなく使命を果たそうとする。まず父に頼み込んで補給物資を自費で送らせた。次にどの部署も管轄していなかったトイレや洗面所の掃除を率先して引き受ける。「物事を始めるチャンスを私は逃さない。たとえマスタードの種のように小さな始まりでも芽を出し、根を張ることはいくらでもある」と抜群の行動力で急速に存在感を示していった。

戦況が激化すると次々に担ぎ込まれる負傷者で院内は溢れ返り、軍医も憔悴して限界に達した。女性看護団による手当てが正式に認められ、超人的な働きで実力を証明する。

とりわけナイチンゲールは患者の包帯を巻くために８時間も跪（ひざまず）き、負傷した足を切断する兵士にずっと付き添って励ました。夜はランプを掲げて病床を見回り、傷病兵たちから畏敬の念を込めて「クリミアの天使」「ランプの貴婦人」と慕われるようになった。

ロンドン・タイムズの報道でナイチンゲールは時の人となり、施設の改善や人員の補充を訴えて国民から続々と寄付金が集まった。患者の死亡率は着任時の42％から１年足らずで２％に激減した。

生命力を高める共感の芸術

1856年３月にパリで平和条約が締結され、４月にクリミア戦争は終結した。ナイチンゲールは最後の患者の退院を見届けて７月に帰国の途につく。国民的英雄の凱旋に世論は沸き立っていたものの過剰な反応を避け、スミスという偽名で人知れずロンドンに到着した。

両親が別宅として利用していたバーリントン・ホテルに住居兼事務所を構え、兵士の死亡原因の究明や陸軍の衛生状態・病院管理に関する研究に没頭する。精魂を込めた800ページに及ぶ報告書は医療制度のみならず英軍全体の組織改革を引き起こした。統計学の面でも役人や議員が理解しやすいように考案された「鶏（とり）のとさか」と呼ばれる円グラフが評判になり、女性初の王立統計学会のメンバーに選出される。

1860年、戦時中に創設されたナイチンゲール基金で聖トーマス病院内に看護学校が設立された。専門的な知識と技術を備えた看護師が養成され、独立した職業として社会的に認知されていく。

同年『看護覚え書』を刊行し、女性たちを中心に看護のバイブルとしてベストセラーになった。看護は医者の仕事と違い、患者の生命力を高める芸術であるとして「看護を行う私たちは人間とは何か、人はいかに生きるかといつも問いただし、研鑽を積んでいく必要がある」と諭しつづけた。とりわけ看護学校の生徒には「わが子を失う親のような気持ちで患者に接することのできない共感性のない人がいるとしたら今すぐこの場から去りなさい」と人間としての誠実さを要求した。

過労で病床に臥しながらも晩年まで著作活動に精を出し、生涯独身のまま90歳でこの世を去る。訃報は全世界を駆けめぐり、新聞はヴィクトリア女王に匹敵する損失で国葬に値すると書き立てた。

だが遺言によって華美な葬儀は営まれず両親の眠る墓のそばに数人の兵士によって埋葬された。墓標にはイニシャルのF.Nとだけ記され、いつのまにか集まってきた群衆が輪を描くようにずっと見守っていた。